

生活の中の
仏教語

「験(げん)をかつぐ」と修験道 その②

ほっと通信編集委員 金城 隆寛

前回は「験(げん)をかつぐ」と修験道というテーマをもとに、験の意味と修験道との関係性について触れました。今回は験かつぎの内容に焦点を当ててみたいと思います。

受験前にカツ丼を食べる、面接前に神社仏閣へ寄る、賽銭箱に五円玉を入れるなどこれらはすべて「験かつぎ」と呼ばれる行動です。無意識のうちに私たちは重要な場面で心を落ち着けるため、あるいは運を天に任せるために儀式的な行動を繰り返します。科学的根拠はなくとも、こうした行動に「意味」を見出し、心の安寧を得ようとしています。ここで験かつぎと縁のある修験道についておさらいしたいと思います。

修験道は、山を聖地として修行を行い、神仏と自然との一体化を体感し精進する宗教の一つです。修行者(修験者)たちは、山岳信仰を基にした儀式を通じて精神を浄化し、身体を鍛え、深い祈りを神仏に捧げます。単に祈るだけでなく、自然の中で神仏とつながることを重視しています。

修験道の修行者は、山を歩き、森羅万象に礼拝し、万物を通じて神仏との結びつきを深めていく過程で、精神的な意味だけでなく生物が持つ神聖な力を信仰によって昇華していきます。現代の験かつぎも、無意識に「万物を通じて神仏とつながる」ことを求めていると考えられないでしょうか。例えば、受験の前に「お守りを持つ」「勝負アイテムを身に付ける」といった行為は、何かしらの儀式的な意味を見出すことで精神を集中させる手段だといえます。

私自身も、受験前に「必ずお守りを持つ」と決めていたことがあります。その小さなお守りが実際に何かを変えるわけではないと分かっているにもかかわらず、それを握りしめることで

心が落ち着く感覚がありました。どんなに冷静であろうと、重要な場面では不安が押し寄せるものです。人はその不安に対抗するために無意識に「儀式」を行い、心の安寧が得られる「意味」を探るのです。まさに修行者が儀式を通じて心身を整え、神仏とつながろうとしたように、私たちは常に無意識下で心を整えるための「儀式」を求めていると考えられます。

現代において験かつぎを単なる迷信として片付けることは簡単です。しかし、そこには古来から続く動物的な人間らしさ、つまり不安を感じたときに心を落ち着け、活力を得ようとする本能的な欲求が込められています。修験道をはじめとした宗教が神仏や自然の力を信じ、直接的な体感を通じて心を整えたように、現代の私たちも時には目に見えないものにすがり、潜在的な活力を得るために「験かつぎ」を行っている場面はあろうかと思います。無意識に行われるこれらの行為は、古来から続く宗教的な感性の名残であり、「目に見えない力」を信じる心が今も私たちの中に験かつぎとして息づいているのです。

千葉県富津市 真言宗智山派 福聚院副住職
宮城県名取市在住

(1119字)